

戦後文学の問題点

—— 純文学と大衆文学の境界の曖昧化 ——

市川英子

序

大衆文学は、純文学の前には必ずといっていいほど「いわゆる」がつく。それほどはつきり決められないものなのだろうか。純文学の範囲はどこまでか。純文学と大衆文学の境界線はどこまでひかれるか。

現在では、二つの存在の影も薄れつつあるように思う。二つの文学が曖昧になった。なぜだろうか。原因は一体何なのか。そのようなことに興味を持ったので、研究してみようと思った。第一章では純文学と大衆文学の歴史的流れを簡潔に、そして第二章、第三章と、境界の曖昧化の原因について、第二章は内部の変化、第三章は外的要因といえるマスコミの発達と文学について、第四章に文学のマスコミ化についてまとめ、結論を記した。

第一章 純文学と大衆文学の歴史的な流れ

純文学と大衆文学という語がいつ生まれ、どういう経路をた

どってきたのか。第一章では手短かにその歴史的な流れをたどってみようと思う。

大衆文学は、大正中期中以降のマスメディアの成熟をふまえて成立した文学である。明治期においての大衆文学は、近世以来の庶民文芸の流れを継承しており、戯作文学は新聞小説の誕生に寄与し、村上浪六らの歴史小説、村井弦斎らの家庭小説を生み、話芸の活字化は講談読物の登場をうながした。そして中里介山の「大菩薩峠」執筆を機に顕在化し、やがて大正末期の大衆文学の成立に至る。

大衆文学は時代小説として成立し、菊地寛、久米正雄、吉屋信子らの家庭小説、恋愛小説などの風俗ものは「通俗小説」と呼ばれ区別された。探偵小説なども同様で、それらがやがて一つになり、大衆文学とみなされるようになったのは昭和五、六年頃からである。

そして戦後、昭和二十年代には「中間小説」という名の風俗

小説が現れ、昭和四十年代に入るとそれがエンターテイメントの名で呼ばれるようになった。

一方、「純文学」という語が通俗・大衆文学に対し、「読者に媚びず純粋な芸術的感興にもとづいて創作された文学」という意味で自覚的に用いられたのは、久米正雄の「私小説と心境小説」(大14)以降であり、そこで久米は、「私」を表現したものが芸術の神髄であり、私小説は文芸のもっとも基本体形だとし、「文学の純粋さは、私小説、心境小説にある」と主張した。この用語が「文壇的普通名詞」となったのは、昭和五年あたりからのようである。ついで「純文学」という概念は昭和七年頃に固定し、その再編の動きが横光利一の「純粋小説論」(『改造』昭10・4)であり、そこで横光は、「純文学とは偶然を廃すること、通俗小説のもつ感傷性のないこと」と述べ、当時の純文学と通俗小説の止揚を図り「純文学にして通俗小説」という「純粋小説」を主張し、中村武羅夫らと論争した。戦後では、平野謙が「『群像』十五周年によせて」(『朝日新聞』昭36・9・13)で、「純文学という概念が歴史的なものにすぎない」、戦後十五年の文学史は、「一方ではそういう純文学概念の更新の過程であり、他方ではかつての純文学概念の崩壊の過程でもある」という論理を提出し、昭和三十六・七年にかけて、かつてない大規模な「純文学論争を引き起こし、「純文学」という概念、あるいは本質についての激しい論議がたたかわされた。

大正の末から昭和の初めにかけて成立したこの二つの文学は戦後になり社会のめまぐるしい変化とともに少しずつ形を変え、やがて交錯していった。

第二章 文壇内部の変化

昭和三十年にいたり、日本の文学界に因襲的な純文学と大衆文学の壁が有名無実となった。その原因の一つとして考えられることは、「大衆文学の質的向上、純文学の大衆化」などである。

平野謙の「『群像』十五周年によせて」が引き金となり、伊藤整の「純文学変質説」をはじめ高見順・大岡昇平ら多くの評論家が意見をたたかわし激しい論争が行なわれた。そこでは、変質とは言いながら質を問うより、売れる「大衆文学」に対し売れない「純文学」という関係論が、論争発端の重要な部分であった。「売れる文学の商品的価値によって売れない文学の芸術的価値が圧迫・圧倒される」という関係論は、この限りでは「変質」ではなくて立場の確執ではない。(『文士と文壇』昭45)という、当時『群像』編集長であった大久保房男の状況論から始った大規模な論争であった。

純文学が変質したと言われた原因の一つに、松本清張・井上靖・水上勉らの登場、活躍があげられる。

『或る「小倉日記」伝』(昭27)で芥川賞を受賞した松本清張が、『点と線』(昭32)をはじめとする推理小説の新生面をひ

らいてから、社会派推理小説は爆発的なブームをおこし、松本清張は一躍大流行作家となった。また、『フライパンの歌』（昭23）などの私小説を書き、貧窮の中に職を転々としていた水上勉が『霧と影』（昭34）『海と牙』（昭35）で清張に次ぐ社会派推理小説作家としてブームにのった。純文学が変質、あるいは衰退したと騒がれたのは、こういった中間小説の流盛に原因があると考えられる。

中間小説とは、純文学と大衆文学の中間に位する小説、あるいは、小説の平均化（芸術性と大衆性の一体化）を意図するもので、芸術的な水準を保ちながらも同時に大衆性のある小説であるといわれている。中間小説は戦後突然はじまった文学形式ではない。昭和十年代の初期に試みられた文学的な諸方向、つまり横光利一が『純粹小説論』で「純文学にして通俗小説」という「純粹小説」を主張し、その試みとして『家族会議』を書いたのが「中間小説」のはじまりといえるもので、それが改めて戦後に継承された面が強い。

中間小説は、実際には純文学と大衆文学の中間というよりも、純文学との限界ははっきりしないが、大衆読物風の作品が主であるので、どちらかというが大衆文学のジャンルにのみ込まれるのではないかと思う。戦後の大衆文学は中間小説として生氣をとりもどしたといわれている。村上元三や吉川英治の新聞小説があたって大衆文学が復活し、中間小説誌の先駆『小説新潮』などのほか、週刊雑誌を主要な発表場所として盛んになった。

純文学ではものたりない読者にとっては中間小説が面白く、純文学になかった小説の面白さを中間小説は豊富に生かしているため、多くの読者層を持った。面白い文学として小説の水ましがはかられたのも事実で、そういった量産によって新しい読者層を獲得しようとする、出版資本のマス・プロダクションの発展が、今日の中間小説を作り出したといえる。昭和三十年代のマスコミの発達とともに、中間小説は今日の小説の大半を占めるまでに隆盛するに至った。

松本清張のように、かつて芥川賞でデビューしたようないわゆる純文学作家で、中間小説風の作品を書くものが出てきた。特に変質説の話題となったのは、水上勉の『雁の寺』（昭36）であった。『雁の寺』は私小説的方法と推理小説が一体化となったものと目され、かつて純文学の中核をなしていた私小説までもが中間小説に接近していったのである。

また、戦前講談読物を書いていた山本周五郎も『落葉の隣り』（昭34）、『季節のない街』（昭37）など、純文学作家も到底およばないような優れた作品を書いた。作家によっては、純文学と大衆文学を書きわけけるものもいた。

今ではもはや芥川賞は純文学、直木賞は大衆文学というこれまでの定式は通用しなくなった。「野生時代」新人賞でデビューした池田満寿夫が同じ作品『エーゲ界に捧ぐ』で芥川賞を受賞し、『浪曲師朝日丸の話・ミミのこと』で直木賞を受賞した田中小実昌が、同質の『ポロポロ』で谷崎潤一郎賞に選ばれる

といった現象も珍しくなくなった。

作家が故意に、純文学と大衆文学を書き分けるといった場合、その裏には「売れない純文学では食べていけない」という切実な現状があった。文学者といえば、イメージとしてあまり豊かではなく病気がちで、質素な身なりで神経質。芥川龍之介のような風貌を思いおこす。

しかし、昭和三十年代に入り週刊誌ブームとあいまって出版界が活況に満ち、それにもない作家生活は確実に保障され、明治・大正・戦前文学者たちのような生活困窮者はいなくなつた。

ベストセラーが相次ぎ、読者層の増幅は純文学にまで余波をおよぼし、大抵の作家が家屋の所持者となるかマンションに入った。現在では長者番付に文学者も登場し、赤川次郎、西村京太郎などは毎年名前が上っている。昭和六十二年度の赤川次郎の納税額が八億六千万円で、推定年収十二億四千七百万円であった。作家一人の腕で、八億六千万円の国税を支払うということはかつては考えられなかった。それでもなお、純文学作家の名前は見当たらないのである。

戦前に登場した作家を主軸として「第三の新人」までもが、昭和三十年代に入り週刊誌や新聞の連載小説を執筆したが、それは単に文学の変質ということではなく、むしろ作家の存在自体が大きく変容していったことのほうに原因の比重がかかっている。

第三章 外的要因

—ジャーナリズムと文学—

一節、マスコミの発達

大衆消費社会の発展によって文学の商品化が進んだ。その結果として、純文学と大衆文学の境界が曖昧になった。前章で述べた、大衆文学の質的向上、純文学の大衆化、中間小説の隆盛なども原因として挙げられるが、その裏にはマスコミの異常な発達があった。つまり、マスコミの発達による影響というものがある。曖昧化の最大の原因ではないかと私は考える。

「情報伝達機関」が「マスコミ」と呼ばれるまでに巨大化したのは、昭和三十年代社会の特色であるが、歴史的にみるとジャーナリズムと文学の結びつきは古い。

夏目漱石や二葉亭四迷の文学は『朝日新聞』の存在と深いかわりを持ち、尾崎紅葉や正宗白鳥が『読売新聞』、芥川龍之介、菊池寛が『毎日新聞』。また、その他総合雑誌の『中央公論』、『太陽』、『改造』、文芸誌の『新小説』、『文芸倶楽部』、『新潮』と、いずれも文学史を支えてきた重要な存在であった。

しかし、昭和三十年代はテレビ時代の開幕とともに文化の視覚化が強まり活字文化の衰退がいわれた。出版界にも危機がさげばれ、打開策として、週刊誌の創刊、素人作家の起用、作家のタレント化、文学賞のショー化、婦人雑誌のワイド化などの方法がとられた。

前章で述べた中間小説の隆盛は、マスコミの発達を抜きにし

ては存在しえなかったと考えられる。

中間小説誌の誕生は、昭和二十二年に創刊された『小説新潮』である。それ以前にも、菊地寛の命名によったと言われる『小説と読物』（昭21〜25?）や、『社会人の文学を築きたい』とした『苦楽』（昭21〜24）などもあった。そして、中間小説の隆盛を引き起こしたと考えられる昭和三十年代の週刊誌ブームは、昭和三十一年に出版社系週刊誌の第一号『週刊新潮』の創刊がその引き金となった。そこには、五味康祐『柳生武芸帳』、柴田錬三郎『眠狂四郎無頼控』が載り、谷崎潤一郎、石坂洋次郎、大仏次郎などの大家や人気作家も連載、読み切りの作品を執筆。五味や柴田は一躍流行作家となり、剣豪小説ブームが巻き起った。新潮社以外の大手出版社は、当初『週刊新潮』の成功を危ぶんで二の足を踏んでいたが、昭和三十四年には『週刊現代』（講談社）、『週刊文春』（文芸春秋社）、『週刊コウロン』（中央公論社）、『朝日ジャーナル』（朝日新聞社）など二十誌が創刊された。こうして、新聞社系、出版社系が入り乱れ、週刊誌ブームとなったのが三十年代後半のことである。

週刊誌ブームは出版社を潤し、作家の生活を潤したが、一方では、週刊誌を媒体として『文学の商品化』がおおいに進み、出版社の販売政策による低俗な読み物の氾濫というマイナス現象も生み出した。

しかし、量産によって新しい読者層を獲得しようという出版社の発展と努力が、中間小説の隆盛を作り出したとはいえず、中

間小説が単に出版商業資本の新しい市場獲得、利潤追求という目的のためだけで生まれたものではない。そのことは前章で述べた通り、中間小説というものの誕生経路などからもいえることである。

一方、純文学の作品を中心に成り立っている『文芸雑誌』はどうであろうか。

戦前、戦後に数々の文芸誌が創刊されたものの、短かければ二〜三年で消えていく雑誌が数多く存在した。

昭和二十一年に『群像』（講談社）が創刊され、二十二年に同人体制で復刊し二十四年には文芸春秋新社からあらたに発刊された『文学界』。そして戦後すぐの昭和二十年に復刊した『新潮』などが今日まで至っている主なものだが、昭和三十二年、河出書房の倒産により『文芸』が休刊。三十七年に復刊するまでのしばらくの間、文芸誌は『群像』、『文学界』、『新潮』の三誌となる。

景気のいい中間小説誌、週刊誌などに比べ、不景気でしかも部数の少ない文芸誌を中心に『純文学』は細々と命をつなぐ存在になりつつあった。

そうはいったものの、文芸誌が週刊誌に押され『純文学』の存在あるいは質にさえも衰退が問われたが、（それは三十年代後半のことである）実際には、量的には盛況だとはいえないが、質的に衰えたとは思えない。その根拠として、この時期伝統的純文学雑誌といえる『文学界』が果たした役割が、はっきりと

芥川賞受賞作に現れている。

二九年上期 吉行淳之介「驟雨」(文学界)

下期 小島信夫「アメリカン・スクール」(文学界)

三〇年上期 遠藤周作「白い人」(近代文学)

下期 石原慎太郎「太陽の季節」(文学界)

三一年上期 近藤啓太郎「海人舟」(文学界)

下期 該当作なし

三二年上期 菊村到「硫黄島」(文学界)

下期 開高健「裸の王様」(文学界)

三三年上期 大江健三郎「飼育」(文学界)

といった顔ぶれ、作品群である。言わずと知れた戦後の代表的な「純文学作家」の面々である。いわゆる「第三の新人」と

「第四次戦後派」といわれる世代である。(第一次戦後派を野間宏、椎名麟三、梅崎春生、武田泰淳ら、第二次戦後派を安部公房、井上光晴、三島由紀夫らとした場合、それにつづく第三の世代は、「第三の新人」と呼び遠藤周作、小島信夫、近藤啓太郎、島尾敏雄、庄野潤三、三浦朱門、安岡章太郎、吉行淳之介らの名があげられる。そして第四次が、石原慎太郎、開高健、大江健三郎らである。)

三十年初頭に芥川賞受賞によって文壇に進出し、そして三十年代後半から四十年代にかけて文学的才能の翼を大きくひろげ、中堅作家として定着した「第三の新人」の時代。その背景には、戦後日本の経済的最盛期があり、マスコミの発達という面で、

出版界にとっても花盛りといえた時代であったことはみのがせない事実である。

二節、石原慎太郎の出現

この「第三の新人」の輩出あたりから、各種の文学賞が文芸ジャーナリズムないし文壇の回転軸となった。正確にいえば、芥川賞が社会的事件として取り上げられ、一般にも関心が持たれるようになったのは、石原慎太郎の「太陽の季節」(昭三十年下半年期)以後の事である。

当時、登龍門と呼ばれるものには芥川賞と直木賞しかなく、しかも後発の新人賞が懸賞当選形式の応募作から選出されるのに対し、芥川賞・直木賞は発表作が対象であるために一種の勲章的な性格を帯びていた。新人作家にとってそれは魅力的で、芥川賞をめざして躍起になっていたといわれている。

昭和三十一年一月、一橋大学在学の学生石原慎太郎の書いた『太陽の季節』(昭30)が芥川賞に決った。私が調べた限り、この事件は出版界をにぎわし、社会に影響を与えたばかりではなく、文壇も大きく揺るがしたものであり、文芸ジャーナリズムと文壇ないし文学者との関係にも大きな影響を及ぼした大事件であった。

受賞決定の翌日の新聞には社会面の記事として大々的に扱われ、『週刊朝日』(昭31・2・9)が「芥川賞の学生作家」を特集した。また、週刊誌や新聞をにぎわしただけでなく、単行本も三十万部を売りつくし、作品は次々と映画化され、「慎太

郎刈り」という髪型もでき、「太陽族」は流行語になった。文壇には、『太陽の季節』をめぐる、亀井勝一郎、白井吉見、中村光夫、山本健吉、佐藤春夫、舟橋聖一などの間で論争が起き、PTAや映倫が騒ぎだすなど、たった一つの文学作品が大きな社会問題にまで発展した。夏目漱石や島崎藤村を知らない人々も、石原慎太郎には憧れ、夢中になった。文学者がこれほどスター化したことは、日本の歴史始まって以来のことである。

戦後十年たった昭和三十年ころは、経済的にもなかなかに安定し、消費生活は急速に上昇し、ぜいたくになってきたが、青年たちは夢を失い、鬱屈していた。非行少年少女がふえ、人々は何かショッキングなものを待望していた。ちょうどその時に現れたのが『太陽の季節』である。湿潤で現状維持的なモラルを持つ大人たちを冷笑し、あけっぴろげな性と風俗を描き、ドライな調子いい文体で書かれた作品であった。若者たちはそこに、自己の世代の文学的表現・主張を見つけ共感し熱狂した。しかし、それからの社会的事件は、マスコミが意識的に拡大し、再生産したためである。

十返肇は、「太陽族ブームはこうして作られた」（『婦人公論』 昭31・9）のなかで、石原慎太郎の人気について、へまず、年齢が二十三歳という若さであったこと。―中略―つぎに彼が柔道二段でサッカーもやればゴルフもやり、一橋大学では「内股の慎ちゃん」とか「ジェット機の慎ちゃん」といわれているスポーツマンであることが注目を惹いた。いわゆる文学青

年ではないことだ。また、東宝映画へ入社したことや、芥川賞受賞の前夜に結婚したことなども、彼についての話題を豊富にしたのだった。そして、小説からは、生意気そうなアプレ青年を連想させるが、逢ってみると、本人が感じのいい好青年であることも宣伝された。と述べている。『太陽の季節』という小説自体の、スポーツのスリルに似た調子のよさと、古い世代（大人）への挑戦的でドライな快感が、若者たちに快い共鳴をあたえたことでもあった。作品と作家自身の両者ともが爆発的な人気をよんだ。おそらく作品よりも、石原慎太郎という個人に対しての人気の方が上まわっていたのかもしれない。これが、「文学者のスター化」である。

さらに、十返肇は、へマスコミの面で個人的な人気が立体化するということは、戦後ジャーナリズムの特徴である。と述べた。芥川賞やその他の新人賞などで出てきた受賞者は、経歴の如何によつては作品を跳び越えて人間的に話題となるという傾向が現れたのも、石原慎太郎の出現からであった。

また、十返肇は「文壇」の崩壊」（『中央公論』 昭31・12）で、へ文壇というものは無くなった―それが今年の「文壇」回顧として私に最も痛切に感じられた印象である。伊藤整のいわゆる逃亡奴隷と仮面紳士によつて構成された文壇（略）は、完全にジャーナリズムの中に崩壊したといえよう。と述べた。さらに、へ貧乏と病氣と女の苦勞を体験しなければ一人前の作家にはなれないというような人間修業の苦勞を持たず、へむ

しろそのような苦勞を輕蔑した若い人たちの作品が商品価値を
持つて登場し、へ古い文壇的倫理は完全に敗北した」といっ
ている。文壇がその權威ないし機能を一時に喪失してしまつた
ということだが、必ずしもそうではない。しかしながら、新人
の「苦勞知らず」の文壇進出経路がそれまでと大きく變つたこ
とだけは否むべくもない。それ以降の新人は、商業雑誌の公募
で、出版社や編集者が中間に介在するという形をとつて繼承さ
れていく。

いづれにせよ、この時期に、現在の文壇ないし文学者とマス
コミあるいは文芸ジャーナリズムとの相關關係の態様がしまつ
た。小説も文学者も、戦後異常に發達したマスコミの中に呑み
込まれてゆくことになつた。

石原慎太郎の出現は、文学のマスコミ時代を告げる象徴的事
件だったのである。

第四章 まとめ、文学のマスコミ化

純文学と大衆文学の曖昧化を調べるために、文壇の内側と外
側からその境界周辺を見てみた。問題があつたのは、いづれも昭
和三十年代であつた。中間小説の隆盛と、それに伴い純文学の変
質が論議をよんだ純文学論争も三十年代である。マスコミが異
常に發達し文壇に影響を及ぼしたのも三十年代のことである。

昭和三十年代は、急速に成長した日本經濟、いわゆる「高度經
濟成長」の時代の始まりに当り、國民の名目所得は大きく伸び、

家庭電化製品を中心に、大量生産・大量販売・大量消費の大衆消
費社会が形成された。國民にも多少のゆとりが開始した。そのこ
ろ、文学全集が出版されブームとなり、それは出版社を潤し、
収録された既成作家を潤したが、文学の興行化に次いで露骨に
現れた文学の商品化は、全集に収められたような純文学にとつ
て、不吉な前兆をはらむ深刻な問題であつた。そして、へ文学
全集を買う一方で、人々はそこに収められていない大衆小説や
SFなどのエンターテイメントを求めていた。つまり、うけ
とる側にも変化があつたのである。湿っぽい純文学よりも、樂
しませてくれる大衆文学へと流れていった。読者を樂しませよ
うと、作家もそれをねらつて書くということがあつた。

戦後の大衆文学は、大衆消費社会を踏まえたマスコミ文学で
あるといわれている。その大衆文学と、文芸雑誌を舞台に細々
と命をつなぐ存在であつた純文学は、変質・衰退・曖昧とさえい
われても、今なお根強く存在している。境界が曖昧になつたとはい
え、歴然と区別されているのは媒体である。へ純文学雑誌と中
間小説雑誌が歴然とわけられているところに、かえつて純文学
と大衆文学の区別も生まれたのではないかと、大衆文学を研
究している文芸評論家の尾崎秀樹は述べている。実際には直木
賞系列の作家が純文学誌に執筆することも少なくなく、はつき
りと限定はできないが、仮に区別をすれば媒体の違いによつてある程度分けることができる。そして文芸誌と中間小説
雑誌、それぞれの媒体に發表された作品の中から選ばれる芥川

賞と直木賞、あるいはそれぞれの媒体が公募する新人賞や選考委員の顔ぶれなどで分けることができると考えられる。

しかし、はっきりと純文学と大衆文学の二つに分けるということは、今となつては困難であるし、わざわざ分ける必要もない。二者択一的にはいかなのが現状ではないかと思う。昭和四十年代に入り、中間小説はエンターテイメントの名で呼ばれるようになった。増々うやむやな表現である。それだけ純文学で扱いきれなくなったものや、大衆文学で扱いきれなくなったものが多くなつてきたと言える。

第二章、第三章であげた中間小説の隆盛、マスコミの発達と、大きくわければこの二つが、純文学と大衆文学の境界を曖昧にした原因であるとは私は考える。しかし、中間小説の隆盛も週刊誌ブームが引きおこしたものと考えると、原因は一つにしぼられるのではないかと思う。マスコミの発達が発文学に影響をおよぼし、「文学」そのものに変化をもたらしたとさえ言える。いかえれば、「文学のマスコミ化」である。

文学のマスコミ化は、今なお続いている現象である。文学が商品として扱われ、売り出されることよつて流行し、質が問われるのはあたりまえのように思う。ベストセラーになつて多く読まれるものは、純文学であつても大衆性も内包している。内容的価値よりも商品的価値の方が先行しているのである。曖昧化はもちろんであるが、文学そのものが低迷しているとさえいわれるのも、マスコミが文学を商品化したためであると思わ

れる。

それが、「文学のマスコミ化」である。

純文学と大衆文学、その二つの境界が曖昧となつたのは、昭和三十年代に異常に発達したマスコミに、原因をみることにできた。これが平凡のようだが、ゆきついたところの結論といえる「文学のマスコミ化」は、現在の文壇にとつても、これからの文学にとつても深刻な問題であり、課題であらう。

〈参考文献〉

一、文学史類

- 。野口富士男「感觸的昭和文壇史」(昭61年7月・文芸春秋社)
- 。秋山虔他編「シンポジウム日本文学①戦後文学」(昭52年5月・学生社)
- 。小田切進「日本近代文学の展開 近代から現代へ」(昭49・12月・読売選書)
- 。白井吉見監修「戦後文学論争下」(昭47年10月・番町書房)
- 。三好行雄・竹盛天雄編「近代文学7 戦後の文学」(昭52年7月・有斐閣双書)
- 。奥野健男「日本文学史近代から現代へ」(昭45年・中公新書)
- 。古林尚・佐藤勝編「戦後の文学」(昭53年・有斐閣選書)

二、年表・事典類

- 。日本近代文学館編「日本近代文学大事典」(昭59年10月・講談社)
- 。「日本文芸鑑賞事典第19巻」(昭62年3月・ぎょうせい)
- 。「昭和文学アルバムII」(昭62年・新潮社)

三、特集雑誌

- 。 「昭和文学の再検討」 (「国文学」 昭62年8月・学燈社)
- 。 「大衆文学・物語のアルケオロジー」 (「国文学」 昭61年8月・学燈社)
- 。 「大衆文学の世界」 (「解釈と鑑賞」・昭59年12月・至文堂)
- 。 「編年体近代文学120年史」 (「国文学」 臨時増刊号・昭60年5月・学燈社)